

恩 徳 讃 (手話表現)



《曲名》
《手話》
《説明》

	おん 恩	どく 徳	さん 讃	
	彌陀	慈愛(鼻の辺りで)	いただく	歌
	彌陀の印	左甲上で右手回す	両手を引き寄せる	両手2指を口元から斜め上に

「御同朋の社会」をめざす宗門では、このたび聴覚に障害をもつ方々も、ともに仏教讃歌を歌えるように「恩徳讃」の手話表現を考案いたしました。この手話表現が本山だけでなく広く全国の寺院、法要で歌われることを願っています。

仏教讃歌「恩徳讃」について

親鸞聖人が86歳の時、ご自身の信心をお詠みになった「正像末和讃」三時讃の最後の一首(結讃)に曲譜を付した讃歌です。1918(大正7)年に発表された浄土真宗本願寺派ハワイ開教区・沢康雄氏作曲のものと、1952(昭和27)年に発表された真宗大谷派清水脩氏作曲のものがあります。



《歌詞》

によらい
如来だいひ
大悲のおんどく
恩徳

は

《手話》

弥陀

あたたかい(2回)

慈愛(鼻の辺りで)

いただく

《説明》

弥陀の印

両手で下からあおぐ

左甲上で右手回す

両手額前より胸前に引き寄せる



●本山では次の法要に手話通訳が行われています。
皆さまお誘いあわせ、お参りください。

4月15日 春の法要

5月21日 宗祖降誕会法要

11月23日 秋の法要

1月15日 御正忌報恩講

み
身をこ
粉に

して

も

ほう
報

ずべし

体※

懸命※

骨おり(2回)※

さらに

感謝

ささげる

右手まわす

頭側より前へ2回

右拳で左腕打つ

親指爪をつけ右親指を上回し左人差指上

左手甲に右手のせ上へ

両手を胸前から頭前へ

さらに上に

※身を粉にしても」の手話表現《体》《懸命》《骨おり》は、気持ちをこめ表情豊かに表すこと。

【原文】^{によらいだいひ}如来^{だいひ}大悲の^{おんどく}恩徳は ^み身を^こ粉に^{ほう}しても^{ほう}報^{ししゅちしき}ずべし ^{おんどく}師主知識の^{おんどく}恩徳も ^{しゃ}ほねを^{しゃ}くだきても^{しゃ}謝すべし

【意訳】^{あみだ}阿弥陀さまの^{むく}救いは、この^{むく}身を^{むく}粉に^{むく}しても^{むく}報^{むく}いなければならぬほどの^{むく}ご恩です。

また^{しゃか}お釈迦さまをはじめ、私に^{しゃか}み教えを^{しゃか}伝えて^{しゃか}下さった^{しゃか}方々のご恩も、^{しゃか}骨を^{しゃか}砕いても^{しゃか}感謝^{しゃか}しつつ^{しゃか}すことは^{しゃか}できない^{しゃか}ほどです。

ですから、^{しゃか}身を^{しゃか}粉にする^{しゃか}ほどに、^{しゃか}骨を^{しゃか}砕く^{しゃか}ほどに^{ほうおんかんしゃ}報恩感謝^{ほうおんかんしゃ}せずには^{ほうおんかんしゃ}おれません。

ししゅ
師主

今まで

左手に右人差指つける

ちしき
知識(ち・しき)の

教えいただく(2回) 人びと

左手の平に右人差指 親指・小指ゆらして

おんどく
恩徳

慈愛(口元で)

左甲上で右手回す

も

同じ(2回)

親指・人差指つまむ右上・左手下)



ほねを

体※

右手で回す

くだきて

骨おり(2回)※

右拳で左腕を打つ

も

さらに

親指爪をつけ右親指を左人差指上に

しゃ
謝

感謝

左手甲に右手のせ上へ

すべし

表す(きっぱりとした気持ちを表す)

左手に右人差指先をつけ手の平を前に出す

※「ほねをくだきても」の手話表現《体》《骨おり》は、気持ちをこめ表情豊かに表すこと。

【語注】

如^{によ}来^{らい}: 阿弥陀如来のこと。

大^{だい}悲^ひ: 大慈悲のこと。阿弥陀如来の慈悲は、計り知れないほど広大なので大慈悲という。

恩^{おん}徳^{どく}: 阿弥陀如来の本願力による恵み。如来が衆生を救済する徳に名づける。

師主^{ししゅ}知識^{ちしき}: 師主とは釈尊のこと。知識とは善知識のこと。阿弥陀如来の法を伝えてくださった師のこと。